

ないのか。その言葉、まことの切支丹とは、この井上には思えぬ」

このやりとりから察するに、遠藤周作は神が弱い者の言い訳として用いられることを嫌がったと考えられる。先ほど新しい神は母性的な性格を持っていると述べたが、この考え方だけだと自分の人生の中で自力で処理できないものを全て神になすりつけてしまえるのだ。神という大きな存在に身体をすつかり預けてしまつという、そんな弱い者の逃げ道として神が利用されるのを防ぐために、「父性的」な性格を残したのではないだろうか。遠藤周作は確かに優しい神を求めたかもしれないが、あくまでそれは「優しい」のであつて「全てを許す」わけではないということをお忘れてはならない。たとえ人生の中の自力で処理できなかったいろいろなことを神になすりつけたとしても、そのなすりつけたという事実も含めて「自分」という一人の人間の人生なのである。その人生の責任は神ではなく自分にあるということをお認識すべきであると言っているのではないだろうか。

遠藤周作が求めた神を知る上で最も重要なことは、神を存在として見るのではなく、人の人生などに働く目に見えない力そのものであると感ずることである。その感じ方は人それぞれで、誰からその力を受けるかも同様である。それは親兄弟からかもしれないし、知人からかもしれない。しかし人それぞれが違った感じ方をするからこそ、人は自分なりの神というものを見つけたしいけるのだ。

黒い雨

重松と鯉

中三三

三浦 領哉
安藤 洋徳
尾上 雅則
河野 正治
小林 純一

序論

一、課題本の選定と紹介

二、テーマ選定

三、研究方法

四、研究目的

五、あらすじ(省略)

六、内部考察

本論

一、重松の「心の負担」(省略)

二、重松の愛情(省略)

三、重松の負担(省略)

四、原爆病患者への差別(省略)

五、重松と鯉(省略)

序論

一、課題本の選定と紹介

我々は卒業共同論文の課題本として「黒い雨」を選んだ。この本を選んだ理由は、この作品が原爆のことを描いた作品ということで参考資料が多く、内容の濃い論文が書けるだろうと考えたからである。しかし、原爆投下という事実に関する資料は多々あるが、こちらにはあくまでその事実に関連した文学作品であるから、それらの資料をそのまま活用することは非常に難しい。またそれらの資料を活用するとしても、それでは卒業共同論文の意義（文学的研究）にそぐわない研究になってしまう。後に述べるが、一時はそういった研究テーマも提案されていた。しかし、先程のような理由で退けられた。今我々がこの研究を発表する中では、当初の見込みほどの資料は得られなかったことを付記しておく。

ここで、「黒い雨」という作品について簡単に説明しておく。

「黒い雨」は著者井伏鱒二が、彼の知人で神戸郡三和町に住んでいた重松静馬をモデルとして書いた作品である。被爆経験者でない井伏鱒二は、この人物が書いた被爆に関する手記を元にしてこの作品を書いたのだ。

「黒い雨」は昭和四十年から四十一年まで「新潮」に連載されていた。その当初は「姪の結婚」という題で、「黒い雨」という題はつ

けられていなかった。確かに、後に述べる大まかなあらすじでも分かるように主人公間重松は、彼の姪である矢須子の結婚に対して悩み、それを助けようとする。その重松の苦悩と矢須子の原爆病の進行する様子が克明に描かれている。

連載当初から、「凄惨さと同時に、それよりもしみじみとした人生永遠の哀愁の籠った戦争文学の傑作」（新潮文庫「解説」と高く評価されていたが、逆に北村美恵は「井伏鱒二『黒い雨』論」の中で、「被爆体験を記録として歴史化し『架空の实在』を生み出すという『勇敢な実験』を評価しつつ、それは『前半でのみ成功し、後半では失敗している』という見方をしている。また、大野晋は「読むのに極めて難儀した」高く評価することができない」と強く否定した。しかし、こうした批判的意見は作品全体を批判するものではなく、作品の一部を批判しつつ全体的には評価しているもので、数も少なかった。当時この作品がいかに称賛されていたかが良くわかる。このような称賛の中で、昭和四十一年に井伏鱒二はこの作品で第十九回野間文芸賞を受賞した。その受賞の際に井伏鱒二は「ルポルタージュのやうなものだから純粋な小説とは云はれない。その点、今度の野間賞を受けるに少し気にかかる」と述べ、「自分が作った小説」と言うよりも「資料を提供してくれた人みんなで作った記録」という見方を強くもっているようであった。

二、テーマ選定

ここで、我々の卒業共同論文のテーマを紹介する。

この作品中では重松らが鯉を育てている様子が描かれている。

我々は、この中で生み出されている「重松と鯉の関係」をテーマとして取り上げることにした。一見、登場するものの中で大した意味を持たないもののように見えるが、以下のような点でかなり重要な役割を果たしていると言える。

第一に、原爆とは直接関係がないように見える鯉が何度も登場していることがあげられる。これは、主人公である重松が何度も鯉を見に行っているためである。

第二に、鯉を中心として重松と浅二郎・庄吉、そして近所の人々との人間関係が表されている点があげられる。

第三に、作品の初めから終わりまで鯉が登場している点があげられる。特に「被爆日記」の清書を重松が書き終えた後に鯉が登場し、そこで重松の気持ちも同時に表されている点は、この作品を理解していく上で非常に重要である。

そこで我々は、先に述べた「作品中に生み出されている重松と鯉の関係」をテーマとし、研究を進めていくことに決めた。

さて、我々がこのテーマを選び、研究を始めるに至った理由とその経過だが、このテーマに落ち着くまでには、相当の時間を浪費した。

当初、以下のような四つの案があげられていた。

- 作品と史実との比較
 - 原爆病についての研究
 - 作品中に登場する、重松の姪で原爆病患者である矢須子の今後
 - 矢須子の悪化する容態と鯉の成育との比較
- まず、「作品と史実との比較」は、「黒い雨」が体験談を元として

日常性を描いた作品であるために資料の模索が困難であると思われる。また、研究の方法についても、「いったいどのよう比較検討していくのか」という進行自体の問題が浮かんできたため、この案は立ち消えになった。

次の「原爆病についての研究」は、現代の不治の病と、当時の不治の病であった原爆病（現代でも不治であるが）とを比較・研究するというものだった。序論の最初に述べたように、このテーマでは研究の内容が「黒い雨」と離れてしまい、卒業論文の「文学的研究」という意義にそぐわないため、テーマの対象外となった。

「作品中に登場する、重松の姪で原爆病患者である矢須子の今後」は、つまり「矢須子の原爆病は治癒するのか、それとも治癒せずに死に至るのか」ということである。作品ではこのことが書かれる前に作品が終わってしまうので、その続きを考えるとというものだ。この案は、矢須子の原爆病は進行して死に至るといっやわわかりきった結論が生み出されることが予想された。また、推測だらけで論として成り立たないと考えられたので、これも立消えとなった。

「矢須子の容態と成長する鯉との比較」は、悪化の一途をたどる矢須子の容態とこれから成長し続けていく鯉という対照的な関係を表すことで、著者井伏鱒二が言いたかったことを考えたいというものだった。この案は、「なぜ鯉が登場してくるのか、なぜ井伏鱒二はこの作品に鯉を登場させたのか」という疑問から生まれた。我々は、この疑問を解かなければ本当にこの作品を理解したことにはならないと考え、このテーマを採用した。そして十二月までこのテーマで研究を進めていた。

そうして、本文中の部分を抜き出し比較検討するという方法で研究して行くうちに、「鯉の存在意義」というものを見い出すことができた。また、鯉の存在意義が見えてくると、この作品の中では「鯉と矢須子の関係」よりも「鯉と重松との関係」の方が重要であることもわかってきた。そのため、冬休み中にテーマについて再度話し合いをし、遅ればせながら「作品中に生み出されている重松と鯉との関係」にテーマを変更した。

三、研究方法

ここで、我々が「黒い雨」をどのようにして研究してきたのかを説明する。

「黒い雨」の作品中で何度も鯉に関する記述が出てくる。従ってこの研究の礎を造るのは比較的簡単であった。しかし、そういった表現の示す本質的なものよりも、そこから読みとれる各人物の感情が重要なので、それぞれの表現からそれらを分析しまとめていく方針で研究した。

さて、我々は「作品中に生み出されている重松と鯉の関係」を分析してきたわけだが、このテーマで研究・検討するにあたって我々は、「重松の行動を讀者として第三者の視点から」研究してきた。

このような視点から重松の考え方、感情の変化を読みとり、重松と矢須子の関係・重松と鯉との関係を調べることにした。

四、研究目的

我々がこのような研究をしていくことで、何を明らかにしてきた

のかをここに書いておく。

前にも書いたように、我々は「重松が何度も鯉を見に行くこと」「黒い雨」という原爆を題材とした作品に鯉が登場すること」の二点に対して特に疑問を抱いていた。そこで、我々はこの研究から「鯉の存在意義」を明らかにしていくことにした。鯉の存在意義とは、つまりこの作品の中で鯉が登場することはいったいどのような意味を持つのか、ということになる。

我々は鯉の存在意義を明らかにしたことで、重松が何度も鯉の様子を見に行っている理由を見い出すことができた。そしてついに、「重松と鯉との関係」を理解するにまで至った。また、このことを理解したことで、我々は著者がこの作品において表現したかった「原爆の被害」以外のことが見えかけてきた。

これが「重松と鯉との関係」というテーマでの研究の目的である。我々は、ここまでで述べてきた手順で研究を進めてきた。その研究の内容をこれから本論で論じて行く。

五 一、「黒い雨」あらすじ（略）

五 二、「被爆日記」あらすじ（略）

六、内部考察

さらに作品の内部に迫ってみることにする。

この作品は、二つの時間の軸を持っている。そのうち一つは、謂わゆる「現在」の時間であり、本文からわかる通り昭和二十五年六

月から八月を描いている。

もつ一つの軸は、主人公閑間重松が清書をしている。「矢須子の日記」(矢須子=高丸矢須子、重松の姪にあたる、閑間家に同居)と「被爆日記」(重松自身の日記)に沿った流れで、この重松の清書は矢須子に関する「原爆病患者ではないか」という周囲の噂を打ち消すためのものである。が、この清書のさなか、矢須子は原爆病の症状を表しはじめ、その病状は重松の妻シゲ子によって「高丸矢須子病状日記」として書かれている。また、矢須子の医者、細川医師から借りた原爆病患者の手記「広島被爆軍医予備員、岩竹博の手記」と岩竹の妻が語った記録も「病状日記」の中で矢須子の闘病生活の支えにするための気つけとして紹介される。

これらの日記や手記は、全て広島原爆についてのものであり、本文よりそれぞれ

「矢須子の日記」 八月五日から九日

「被爆日記」 八月六日から十五日

「岩竹博の手記」 六月末から九月

の間の過去の時間が描かれているのがわかる。

以上にあげた二つの時間は、前者が原爆投下後数年を経た平和な日常の上にあるのに対し、後者は原爆投下当時の非日常的な様子を表している。これら二つの時間は対照され、それぞれの世界を色濃く浮かび上がらせている。原爆投下も一つの過去とされ、誰もが戦争前の雰囲気に戻った広島島の田舎、小島村と阿鼻叫喚の原爆の世界である。この対照により、著者は過去にあった恐るべき時間と現在にも痕を残すその過去の双方を糾弾していると言える。

本論(略)

結論

著者はこの「黒い雨」という作品の中に原爆による被害を書くことで、原爆を二度と使ってはいけない、と主張している。我々はこの他にも著者の主張があると考え、それをこの卒業共同論文で研究してきた。その結果をここで説明する。

矢須子の発病後、重松は矢須子に対して直接愛情を表現していない。しかし、重松は鯉を矢須子と同じように思い、育てることで矢須子への愛情を表現している。また、矢須子が発病するまで重松は日記を清書することなどでも愛情を表現している。ここから、本論でも述べていたように重松は矢須子に対して深い愛情を持っていたことがわかる。また、矢須子もそのような重松に対して愛情を持っていた。

一作品中で、重松は庄吉・浅二郎という原爆病患者と共に鯉を育てていた。彼らは原爆病の治療の一環として鯉を育てていたわけだ。

著者は重松と矢須子の愛情、そして重松と庄吉と浅二郎の友情を描くことで原爆病患者同士の友情・愛情を表現した。それと共に、原爆病患者が互いに助け合って原爆病を治そうと努力する様子をも表現した。

また、重松は矢須子の発病・縁談や矢須子の保護者としての責任そして原爆病患者の差別などに負担を感じていた。重松にはこの心の負担を癒す必要があった。なぜならこの心の負担を癒さないまま

では重松の原爆病はさらなる悪化をとげるだろう、と我々は考えたからである。重松の心を癒したものは鯉であった。特に矢須子の発病後、重松が矢須子に直接愛情を表現できなくなつてからは、鯉が重松の心の支えになつていたので。

ここで著者は、原爆病患者が互いに協力できない状況下でも、重松のように心の支えをつくるなどの努力をして必死に生きようとする様子を描こうとした。

これまでの研究から、この作品の中では、「原爆病患者同士が互いに助け合つて、病を治癒させようとしている」ことがわかつた。そして、原爆病患者は、

この病気では死にたくない。どこか他の場所で納得の行く病気で死にたい（本文二八五頁）

と思つていた。

また、矢須子が発病した後の重松のように、原爆病患者同士での協力ができない場合でも鯉のような心の支えをつくり、心の負担を軽減させようと努力している人もいる。この作品の中では、原爆病という不治の病にも負けずに生きていこうとする人々の人間模様が色濃く描かれている。

ところで、矢須子の縁談は彼女に関する原爆病の噂によって破談になつていたわけだが、このことから当時、原爆病患者に対する差別があつたことがわかる。原爆病は不治の病と呼ばれるように医学では治すことのできない難病であつた。もちろん現在に至つても不治の病であるが、現代の他の難病の人々に対する扱いを見てわかるように、明らかな差別が行われている。現代のように医学が発達し

ていなかった当時、患者に対する差別は今よりもっと激しかったに違いない。

著者はこの作品の中で原爆による大きな被害を描くことで原爆投下という事実を批判している。が、その一方で原爆病患者同士が互いに協力しあつたり、心の支えをつくつたりすることで必死に生きようとする様子を描き、そついつた原爆病患者を差別することを批判している。つまり、当時患者たちを差別していた人々に対して、彼等の必死に生きようとする姿を読ませることで彼等に対する差別的な行動を抑制させようという著者の意図が見えるわけである。また、そのような不当な差別に苦しむ原爆病患者に対する激励の気持ちもつかがえる。同時に患者たちの苦悩と、その苦悩に対する精神的プラス要素の必要性をも説いている。

こうして我々は、この「黒い雨」という作品の中で鯉という一見作品と全く関係のなさそうに見えるものに注目して研究を進めてきた。著者は鯉をこの作品に登場させることで、原爆病患者達が必死になつて生きている様子を表し、「原爆病患者に対する差別への批判」を主張した。

ここで、ここまでの我々の研究の成果をまとめてみる。

著者は、この作品の中で何を主張したかというのは、先に述べた通り、

- 原爆投下という事実に対する批判
 - 原爆病患者の生き続けるための努力
 - 原爆病がもたらす人間関係の変化
- 最初の一つは、作品全体からわかる著者の主張であるが、後の二

つは、重松・矢須子のやりとりが主となって織り成されている。苦悩する重松の心を癒していた鯉もこれらの著者の主張を引き出すのに大変重要であった。

最後に、重松と鯉の関係をまとめてみる。鯉は、庄吉・浅一郎・重松が共同で育てていたものだが、矢須子の発病後に、重松の鯉に対する気持ちは変わってきた。矢須子の発病のため、重松は矢須子に直接愛情を表現できなくなり、その矢須子に対する愛情表現を鯉に対して行ったわけである。従って、重松にとって、鯉は愛情表現という上では矢須子の身代わりであった。重松は矢須子の病気に悩まされている自分の心を、鯉によって癒してもらっていたと言える。

我々は、「黒い雨」の研究をふまえて、現代の社会にある問題について考えた。そして、我々は次のように結論を出した。

「社会的に弱い立場にある人間を差別してはいけない。そして、そういった弱い立場にある人々に対して我々は、彼らに対して精神的プラス要素を与え、互いの信頼を築いた上で、差別をなくしていくべきである。」

以上が我々の卒業論文における主張である。

「ひかりごけ」論

中三五

川添 彬人
新藤 稔之
鈴木 啓史
千田 勇一
宮城 大和

序論(省略)

第一章 作品およびテーマ選定の理由

第二章 作品の基本展開

本論(省略)

第一章 文章構成の考察

第二章 泰淳文学と「ひかりごけ」

第三章 人肉食の位置付け

第四章 船長の「我慢しています」についての考察

第五章 「光」についての考察

結論

結論

これまで、様々な視点から「ひかりごけ」を見つめ、それについ

て論じてきた。そこで最後に、それらをまとめて一つの結果をみちびき出そうと思ふ。

作家武田泰淳を誕生させたと言つても過言ではないのが、生きてゐるのが恥ずかしいという苦しみ」の自覚であると言える。

この自覚はどこから発生したもののか。第二章でみたように、その原点は、戦場に立たされた人間の心理を扱つた「審判」(昭和二十二年)にある。これは戦場に立たされた人間の心理、つまり自分は殺されたくないし、他人を殺したくない。しかし、自分が殺されてしまつて他人を殺してしまふ。そういう矛盾した、二律背反の状況、つまり、極限状態の中の人間の心理を書いたのである。そもそも泰淳は、実際に戦場に立つて、生きてゐることが恥ずかしいという苦しみ」を味わつてしまつたのである。

また、その経験が「司馬遷」(昭和十八年)を書かせた。ここでは中国王朝の絶対性を否定し、「滅亡をくり返しながら持続する世界」を表現した。それによつて、当時(戦時中)の日本のアジアへの侵略と、その絶対性を否定し、帝国主義の日本もいつか必ず滅びることを考えたのである。

「司馬遷」には、その後展開される泰淳の思想の神髄がある。泰淳は「司馬遷」の中で、「栄光にみちた、平和的な伝統はいつまでも続くものではない。それはいつか滅亡によつて終る。」と明言している。これは「史記」の三元論に基づくもので、一つの思想は次の思想の影響を受け、変化させられる。そしていつたん無になるのである。一つの絶対は、いつまでもその絶対性が保障されることはない、ということなのである。この思想は、後に書かれる「ひか

りこけ」の中でも、泰淳の思想の中心となつてゐる。

「ひかりこけ」は難破船人肉食事件という実際におこつた事件の上に、武田泰淳の考えなどが組み立てられてゐる。実から発して虚にいたる」という小説の方法を確立させた、泰淳の記念碑的な作品である。

では、その泰淳の「実」の上に組み立てられた思想とはどのようなものだったのか。

武田泰淳は「ひかりこけ」の中で、極限状態における罪惡を羅列して、どれがより重い罪なのかなどと言つてゐる。ここで分かるのは、泰淳は、その五つのうちのどれが一番重いのかなどという単純な立場には立つていないのだ。それはもはや、人間の倫理や、ことの善悪などの次元にはたちどまつていないのである。

この「ひかりこけ」で武田泰淳は「文明」の言葉に隠された本源的な人間の問題に、「殺人」と「肉食」の視点で、正面から立ち向かつてゐる。肉食だけが、神を恐れぬ行為ではないのだ。殺人だつて十分神を恐れぬ行為である。船長は裁判中、「こつ言つてゐる。」「あれをやつた人には見えないんですよ。この「あれ」とは、肉食だけではいと言へる。「あれ」を具体的に突きとめると、それは「生きるためにしたこと」と言つことができる。

また、泰淳は、「荒々しい自然のエネルギーが彼の肉体だけよけて通つたようです。」といった中学校長すらが荒々しい自然のただなかに置かれれば、殺人と肉食を行つ船長に変化することを疑つてゐない。泰淳はこれを、極限状態の中で人間の運命とし、否定しないのである。つまり、泰淳は、「すべてのものは変化する。変化す

るものは、互いに関係し合って、変化する。」という諸行無常の定理を實踐してしまつたのである。

次に、第一幕と第二幕の中で船長は、「我慢しています」と言っている。第一幕では「生きてゐることを恥ずかしいとする苦しみ」を野性的に理解し、我慢し、「せつねえ」と表現している。また、中学校長へと変化し、第二幕では、それを、理性的に理解し、それを、運命として冷静に受け止め、我慢しているのである。

また、これを別の意味でとらえることも可能である。船長は裁判中に、「例えば、裁判を我慢しています。」と言っている。これは、どういふことなのか。その後、裁判所にいる全ての人の首に光の輪がつく。つまりすべての人々が「あれ」をしてしまつていたのである。船長は、生きるために自分がしてしまつたことに気付かず、「天皇」の二文字を武器として使うような人々に裁かれるのを我慢しているのである。

泰淳にとつて、この善悪などは問題ではないのである。むしろ文明社会の定めた倫理や秩序をうのみにし、殺人にはなれつこになり、人肉食をおぞましい罪と決めつけ、「文明人」と錯覚している現代の人達を批判しているのではないだろうか。自分達の利益や都合のいいように、物事をはかるあまり、周りを見失つてしまつていく、いいかえると、自分達が生きるためにしたこと他人に迷惑がかかつていることに気付かないのである。つまり、「光の輪」とは「生きるためにすることによって出てくるもの」であり、又「罪」も時と場合によって悪か、それでないかは変化するものである。これが仏教の教えの諸行無常につながるのである。

この作品を問題提起作品とみて、最終的な結論を出そうと思つ。「ひかりこけ」は、自らを「文明人」と錯覚している現代人を平和に包み込んでゐる現代の文明社会に対して、もっと自分達のできたことをふりかえり、見つめなおす必要があると警告しているのである。

僕らはこの一つの結果を導き出すことに成功した。